

ลมจากกรุงเทพฯ  
バンコクの風



JSPS  
BANGKOK  
NEWSLETTER  
2014-15 Vol.4

Ubun Ratchathani  
ウボンラーチャタニ、タイ

JSPS BANGKOK  
CONTENTS

JSPS主催セミナーの開催	01	センター活動記録	14
バンコク研究連絡センターの参加イベント	05	コラム	15
JSPS同窓会情報	07	学術情報 (2015年1月-3月)	17
特集「世界の農業と食糧安全保障の将来、そして学生や 若手研究者に期待するもの」国際連合食糧農業機関 (FAO) 事務局長補兼アジア太平洋地域代表 小沼廣幸	10		



## センター長挨拶

バンコク研究連絡センターの季刊報告書「バンコクの風」（2015年1-3月分）をお届けします。

昨年暮れ「スーパーグローバル大学創生事業」で A、B 型合わせて37大学が選ばれました。これらの大学の実施計画書を読んでみると、これからの10年間で、世界の大学ランキング100位以内をめざす、英語で学位が取れるコースを開設する、海外の大学との学術協定を増やすしダブルディグリーや単位互換制度を増やす、外国人の教員や留学生の数を倍増する、職員の海外研修制度の充実などなど、日本に大学のグローバル化に向けての様々な目標値が書かれています。「夢物語」で終わらないよう、できるところから一歩一歩進めてもらいたいと思いますし、アセアンを所管する当センターとして、それらの大学のアジア戦略に対して協力してきたいと思っています。

そのような中、バンコクにオフィスを構える日本の大学（私が赴任した3年前は、12、3大学だったが、今や40になるうとしている）の情報交流ネットワークが1月に発足しました。

Japanese University Network in Thailand (JUNThai)と呼び、3か月に1回をめぐりに、情報交流を目的にして会合を開くという緩やかなネットワークです。アメリカサンフランシスコ湾沿いの都市に拠点を置く日本の大学のネットワーク Japanese University Network in Bay Area (JUNBA)は、JSPS サンフランシスコセンターが事務局を引き受けていますが、タイについては、大学の自主的な運営ということで、京都大学 ASEAN 拠点、大阪大学 ASEAN センター、東海大学 ASEAN センター、明治大学 ASEAN センターの4大学が幹事校として運営されます。当センターはオブザーバーの形での参加ですが、大学連携機関として JASSO や日本大使館とも協力しながらお手伝いしていく予定です。

当センターの所管地域は、アセアン諸国と先述しましたが、すでに同窓会があることからバングラデシュを担当していますし、ネパールに同窓会が発足し（本部の承認待ち）、スリランカでも同窓会設立の動きがあるということで、活動の範囲が広がってきました。2015年度は、前年に比して一層多忙になる予感です。

本号の編集は、国際協力員として4月に赴任しました辻修子さん（鹿児島大学）が担当しています。前任の轟裕美さん（九州大学に復帰）同様、皆様のご支援ご協力をお願いします。

追伸：これを書いたすぐ後に、ネパールで大規模な地震が発生し、多くの犠牲者がでました。心よりお見舞い申し上げます。2月に当地を訪問し、同窓会の設立の打合せをしたばかりで、お会いした設立発起人の方々の安否を心配しておりましたが、無事との返事があり安心したところです。これから復興に向けて大変な努力が必要ですが、当センターとしてもできる限りの協力をしていく所存です。

2015年4月吉日

JSPS バンコク研究連絡センター長 山下 邦明

# JSPS 主催セミナーの開催

バンコク研究連絡センターは、タイを中心に担当国の大学等高等教育や研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターの訪れた機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

## JSPS-JAAT-NRCT セミナー“Health and Aging” および 2013 年度論博メダル受賞者による博士論文発表会を開催（2月27日）

テーマである“Health and Aging”は、高齢化社会を迎えつつあるタイにおいて、超高齢化社会をすでに経験し、社会の仕組みを整備している日本から、高齢化社会への対応を学ぶことを目的として JAAT 理事会で提案されました。

セミナー基調講演者として東海大学・濱本和彦教授をお招きし、「An Intuitive Human-Interface-web usability and virtual reality」と題して、高齢者にも使いやすいインターネットは何かということを中心に講演されました。

インターネットウェブサイトのユーザビリティ（文字の大きさ、文字色、背景色、写真と文字のバランス、文字および行間等）について世代ごとに調査した結果に基づき、どのようなインターフェイスであれば高齢者が使いやすいかということを解説されました。



講演される濱本教授



講演される Wichet 助教

タイ側からは、この日時期 JAAT 理事に選出されたマヒドン大学薬学部の Dr. Wichet Lelamanit 助教に「Herbal and dietary supplements for elderly people」と題して講演いただきました。

高齢者がより長く健康的に若々しく生きるために必要な栄養素とその効用を薬学的な観点から紹介され、効果的な野菜やサプリメントの摂り方等、多数の具体例を用いながら発表されました。

写真や図表を多用し食品の栄養素とその効能について、ユーモアを交えながら説明された発表に、参加者も熱心に聞き入りました。

セミナーに先立って開催された 2013 年度に論文博士号取得希望者に対する支援事業により博士号を取得した研究者に対する論博メダル授与式に引き続き、受賞された 7 名のうち当日出席した 6 名による博士論文発表会も開催されました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ：  
<http://jsps-th.org/2015/02/27/2957/>)



論博メダル授与式で Dr. Sunee JSPS タイ同窓会長、NRCT NRCT Krithawat 事務次長と受賞者

# JSPS 主催セミナーの開催

バンコク研究連絡センターは、タイを中心に担当国の大学等高等教育や研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターの訪れた機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

## ミャンマー・ヤンゴン大学で JSPS 事業説明会を開催（1月16日）

今回の開催は、2014年7月のヤンゴン大学訪問の際の Aung Thu 学長、Aung Kyaw 副学長（首都大学東京で博士号取得）、Kyaw Naing 副学長（北海道大学で博士号取得）との協議に基づき実現したものです。

セミナーでは Aung Thu 学長の挨拶の後、山下センター長より日本の科学技術政策や JSPS の組織紹介、山田副センター長より JSPS の国際事業を説明しました。ヤンゴン大学から、外国人特別研究員に採択された Dr. Kay Thwe Hlaing、外国人招聘研究者（長期）に採択された Dr. Kay Lwin Tu を講師に招へいし、申請方法から受け入れ研究者の探し方等、詳細な情報について講演頂きました。



今回は JSPS バンコクセンターがヤンゴン大学での初めての事業説明会と言うことで、200名の参加者があった他、地元のメディアの取材がありました。後日テレビでも山下センター長のインタビューの放送が行われたとのことでした。

(JSPS Bangkok Office ホームページ：  
<http://jsps-th.org/2015/01/16/2728/>)

【インタビューを受けるセンター長】

## タマサート大学ランシットキャンパスで JSPS 事業説明会を開催（1月27日）

今回の開催は2011年7月以来となりました。Pramuan Tapchaisri 研究担当副学長にご挨拶頂き、JSPS のプログラムの助成範囲はタイで需要の高い自然科学分野だけではなく全分野を対象としているため、積極的に申請を検討して欲しいと述べられました。

その後山田副センター長より JSPS 国際事業を説明しました。タマサート大学からは論文博士号取得支援プログラムで神戸大学で博士号を取得された Chatchai Marnadee 助教より、論博プログラムの申請プロセス、日本での生活や研究環境、研究者としての心構え等について講演頂きました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2015/01/27/2780/>)

# JSPS 主催セミナーの開催

在タイ日本大使館主催地方留学説明会に参加、3 大学で JSPS 事業説明会を開催

## 🌀 在タイ日本大使館主催日本留学説明会

在タイ日本大使館が主催する地方留学説明会では実施されており、JSPS は 2012 年度より本格的に参加しています。日本の参加機関全員でまず表敬訪問を行った後、大使館と大学は学生を対象として留学説明会、JSPS バンコク研究連絡センターは研究者を対象に JSPS 事業説明会を開催しています。

## 🌀 ウボンラーチャタニ大学 (2 月 4 日)

ウボンラーチャタニ大学への訪問は 2013 年以来 2 年ぶりとなります。JSPS 事業説明会には 30 名近くの研究者が参加しました。今回の説明会は、農業生物資源研究所 (NIAS) で外国人特別研究員に採択された農学部の Dr. Bubpa Chaitieng より、日本での研究活動や生活、また JSPS 国際事業への申請について講演頂きました。また今回のセッションに参加頂いた元国費留学生で JSPS 拠点大学交流事業に参加されていた薬学部の Dr. Thaweesak Juengwatanatrakul から日本での経験について説明頂きました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2015/02/04/2809/>)

## 🌀 プリンスオブソンクラ大学 (2 月 13 日)



昨年に引き続き実施した JSPS 事業説明会には 30 名近くの研究者が参加しました。JSPS の事業経験者からの説明については、JSPS 論文博士取得支援事業で論文博士を取得された理学部の Dr. Sirusa Kritsanapuntu 助教、また自然資源学部の Dr. Sompong Te-chato 准教授から日本での研究の経験等について発表頂きました。

今回、事業説明会に初めて在タイ日本大使館 係一等書記官にお越し頂き、文部科学省奨学金について説明頂きました。博士号を持たない若手教員もまだまだ多く、博士号取得の需

要、意識は非常に高い状況です。当センターからは JSPS 論文博士号取得支援事業について説明を行っていますが、日本への留学のための奨学金情報の提供は大きな意義がありました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2015/02/12/2839/>)

## 🌀 タクシン大学 (2 月 14 日)

タクシン大学での事業説明会の開催は初めてとなります。事業説明会はソンクラキャンパスで実施され、25 名の研究者の参加がありました。またパツルンキャンパスでも事業説明会がサテライトで中継され、こちらも 10 名ほどの研究者が参加されました。

今回 JSPS 論文博士号取得支援事業で東北大学で博士号を取得された Dr. Kasem Asawatreratanakul 教育・研究担当副学長にご挨拶頂き、ご自身の日本での研究についてもお話いただきました。

またプリンスオブソンクラ大学に引き続き在タイ日本大使館 係一等書記官にお越し頂き、文部科学省奨学金について説明頂きました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2015/02/13/2849/>)

## ネパール・トリブバン大学工学研究院で JSPS 事業説明会を開催（2月20日）

JSPS ネパール同窓会（NJAA）との共催で JSPS 事業説明会をトリブバン大学工学研究院で開催しました。ネパールでの JSPS 事業説明会は今回が初めての開催となります。トリブバン大学は、ネパールで最大の高等教育機関として、1959年に設立されました。

今回の事業説明会では、まず NJAA の Dr. Rijan Bhakta Kayastha 会長より、NJAA の設立に至る経緯と今後の活動予定について、講演頂きました。また引き続き、Nepal Academy of Science and Technology の Vice Chancellor である Prof. Dr. Jibraj Pokharel より、ネパール発展のための科学技術について、科学技術戦略の目標や政策勧告について、ご講演いただきました。



山下センター長、山田副センター長による JSPS の事業説明の後、今回の事業説明会を主催いただいたトリブバン大学工学研究院長の Prof. Dr. Tri Ratna Bajracharya より、工学研究院のミッションや目的などについてご説明いただき、閉会の挨拶となりました。

今回の事業説明会には50名ほどの参加があり、日本での研究、共同研究について多くの質問が出されました。当センターは今後とも、NJAA と共同で事業説明会を実施していく所存です。

(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2015/02/20/2879/>)

## NSTDA（タイ科学技術開発庁）で事業紹介セッションを実施（3月31日）

NSTDA（タイ科学技術開発庁）が主催する NSTDA Annual Conference (NAC) 2015 が開催され、当センターはその中のセミナー“International Funding Programs: Opportunities for Thai Researchers”で事業紹介を行いました。

本イベントは1万人の入場者がある大学でいうところのオープンキャンパスのようなイベントですが、開会式にはシリントン王女様が臨席される格式高い催事です。その中のプログラムで、諸外国の研究助成機関のガイダンスが組み込まれ、日本からは JST (e-ASIA JRP)の岸田絵里子プログラムコーディネーター、AUN-SEED Net の渡邊元治副チーフアドバイザー、そして JSPS が事業紹介を行いました。実際に来場されたのは30名程度の参加でしたが、若手研究者たちが真剣に耳を傾けていました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2015/03/31/3008/>)

# バンコク研究連絡センターの参加イベント

バンコクでは、国際的な学術シンポジウムやイベントが数多く実施されており、当センターも積極的に参加し、ASEAN 地域の最先端の学術情報の収集に努めています。

## 第 1 回・第 2 回在タイ大学連絡会 (JUNThai) に参加

2015 年 1 月 12 日、在タイ日本国大使館にて第 1 回在タイ大学連絡会 (Japanese Universities' Network in Thailand (JUNThai)) が開催され、タイに事務所などを設置する 18 大学の代表者及びオブザーバーとして日本国大使館、日本学生支援機構、アドバイザーとしてタイ、キングモンクット工科大学・関連学術顧問が参加しました。

また 3 月 9 日には、明治大学アセアンセンターで第 2 回在タイ大学連絡会 (JUNThai) が開催され、タイに事務所などを設置する 18 大学の代表者とオブザーバーとして日本国大使館、日本学生支援機構、JSPS バンコク研究連絡センター、アドバイザーとしてタイ、キングモンクット工科大学・関連学術顧問が参加しました。また、3 月 8 日にタイ同窓会を立ち上げた北海道大学もオブザーバーとして参加しました。



### JUNThai 概要

当連絡会は、大学の国際化推薦を背景にして、現在、30 以上の日本の大学がタイに現地事務所を設置し、活動を展開していることから、これらの事務所間の情報交換、活動の相互連携、現地に勤務する教職員の親睦を図るために設置されたものです。この連絡会は以下を目的として掲げています。

### 目的

- (1) タイと日本の大学の学術交流などの相互協力における諸課題や喫緊の課題に対する情報交換・共有
- (2) タイの大学等学術機関の動向や活動について学ぶ機会を得ること
- (3) 現地における教職員の親睦と豊かで充実した生活を送るための交流
- (4) 大学間における相互の連携や協力
- (5) 学生交流や留学生の募集に関する情報交換
- (6) タイ国内の大学等に対する日本の大学の連絡先案内

JUNThai は参加大学により主体的に運営され、2015 年 3 月までの暫定幹事を大阪大学 ASEAN センター、京都大学 ASEAN 拠点、東海大学 ASEAN オフィス、明治大学 ASEAN センターが務めます。



(JSPS Bangkok Office ホームページ 第 1 回 JUNThai : <http://jsps-th.org/2015/01/12/2770/>  
第 2 回 JUNThai : <http://jsps-th.org/2015/03/09/2935/>)

これまで当センターウェブサイトでも報告してきたとおり、2014 年に入り日本の大学のタイへの進出が加速し、現地事務所も 2014 年度だけで 5 箇所以上が開設されました。各大学の事務所設立の目的は、研究や留学生獲得など様々ですが、海外で活動を展開する中で、一つの大学だけでは解決が難しい課題に直面している一面もあります。今回の JUNThai 設立を契機に、個々の大学の活動が連携し、情報を共有することで課題解決や、日本の大学の活動の発展につながることを期待されます。JSPS バンコクセンターもオブザーバーとして参加しておりますが、できる限り協力していきたいと考えています。

# バンコク研究連絡センターの参加イベント

## 富山大学薬学部とチュラロンコン大学薬学部共催セミナーに出席(1月22～23日)



チュラロンコン大学薬学部講堂で、富山大学とチュラロンコン大学薬学部共催のセミナー「薬学研究における最新の科学・技術の動向」(Advanced Science and Technology in Pharmaceutical Research)が開催され、山下センター長が開会式で祝辞を述べました。今回のセミナーは、シリントン王女の60歳の誕生日を記念して開かれました。また国際薬学学会の第31回年次大会としての開催でもありました。

今回のセミナーは、2001年から2010年までの10年間、富山大学とチュラロンコン大学が、JSPSおよびNRCT(タイ学術研究会

議)の支援をそれぞれ得て実施してきた拠点大学交流事業(2010年度で本事業は終了)の「薬学分野・天然薬物」プロジェクトのフォローアップとしても位置付けられており、両大学の研究者による研究発表が行われました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jps-th.org/2014/11/20/2632/>)

## 上智大学 ASEAN ハブセンター開設記念シンポジウムに出席(3月6日)

上智大学は2015年2月1日に上智大学 ASEAN ハブセンターをバンコクに開設されました。これはルクセンブルク、カンボジア、中国、エジプトに次いで5番目の海外拠点となります。

本シンポジウムは、「ASEANにおける高等教育の質保証と質改善—人的資源格差の是正へ向けた調和化とネットワーキング」、「AIMS シンポジウム: AIMS プログラムにおける質保証」をテーマとして、上智大学及びタイ教育省などの講演者を招へいして発表が行われました。パネルディスカッションではアセアン諸国(タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン)の大学で大学の国際化を担当する教員により、AIMS プログラムにおける質保証をテーマに討論が行われました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jps-th.org/2014/11/24/2650/>)

## 中央大学タイオフィス開所式及びシンポジウムに出席(3月21日)



る学生も多数出席して、大変華やかな会議となりました。

タマサート大学タープラチャンキャンパス法学部棟で開催された中央大学・タマサート大学コラボレーションセンター(中央大学タイオフィス)開所式及びシンポジウムに当センターからセンター長、副センター長が出席しました。

中央大学は、2013年5月にグローバル中央シンポジウムを開催し、当センターからも参加、中央大学の海外オフィスはハワイに続き2カ所目となります。在タイ日本大使館及び多数のタイに事務所を持つ日本の大学、また中央大学からタイに留学している

(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jps-th.org/2015/03/21/2970/>)



バンコク研究連絡センターは、日本学術振興会の国際交流事業で訪日経験のある研究者の組織である「JSPS 同窓会」の支援も積極的に行っており、現在管轄地域内に同窓会が組織されているタイ・バングラデシュ・フィリピン JSPS 同窓会の活動支援、また、ネパール、ベトナムでの新規同窓会設立に向けても支援を行っています。

## JSPS ネパール同窓会(NJAA)設立準備会議及び関係機関への訪問 (2月19~20日)



JSPS ネパール同窓会 (NJAA) 設立準備のためにネパール・カトマンズを訪問しました。

2月19日はNJAAのDr. Rijan Bhakta Kayastha会長及び5名の理事との間で、NJAAのこれまでの経過報告及び同窓会の事業活動の予定について、議論を行いました。

NJAAは2014年1月に同窓会設置を考えた数名が、広く参加を呼びかけ2月7日に第一回準備会合を開き、同窓会設立のためのタスクフォース(発起人会)を立ち上げ、それ以降、毎月会合を開催してきました。この間、同窓会規約、事業計画の作成、理事会の構成などを準備しました。それらを踏まえて、JSPS本部にも連絡を入れた後、Lalitipur市(同窓会の所在地)並びに政府内閣府に団体登録申請を行い、2014年12月に承認を得、その後JSPS本部からの正式承認についてJSPS

本部へ打診したものです。これを受けて、今回バンコクセンターがネパールを訪問し、同窓会設立に向けての正式な準備を整えることとなりました。

今後の同窓会の承認に向けて、JSPSの同窓生リスト(約80名)を基に、同窓会への加入促進をこれからの2か月をかけて集中的に行い、同窓会創設時メンバーとして確定することを目指します。

2月20日は、日本大使館、教育省、JICA事務所への表敬訪問を行うとともに、今後のJSPS同窓会活動について協力を要請しました。当センターとしては、各関係機関の協力を得た上で、ネパールでの同窓会活動支援を行っていく所存です。

(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2015/02/20/2869/>)

## JSPS タイ同窓会 (JAAT) 第6回総会を開催 (2月27日)

今回で6回目を向かえたJSPSタイ同窓会総会には50名以上が出席し、Dr. Sunee会長とDr. Danai事務局長を議長として議論が進められ、新たに地方代表を中心に新理事4名が選出されました。

これまでは理事の多くがバンコク近郊の大学や研究機関に所属していましたが、今回新たに地方都市からの理事が参加することにより、JAATのネットワークが広がりました。当センターが地方大学を訪問する際にも、これらの代表理事を積極的に訪問し、よい関係を築いていきたいと考えています。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2015/02/27/2946/>)

## JSPS フィリピン同窓会 (JAAP) を訪問及び Bridge 選考委員会出席 (3月10日)



フィリピン科学技術省 (DOST) を訪問し、外国人研究者再招へい事業 (BRIDGE Fellowship Program) 選考委員会に出席するとともに、2015 年度計画に関する打ち合わせをフィリピン同窓会と実施しました。

Bridge プログラムは、JSPS のプログラムで日本での研究活動を終了した外国人研究者に対し、再度来日して日本人研究者との研究協力関係を形成・維持・強化する機会を提供する事業です。

Bridge 選考委員会には、Dr. Jaime Montoya JAAP 会長、審査委員の Dr. Renato G. Reyes 事務局長、DOST 事務次官の Dr. Amelia Guevarra、及び山下センター長が出席しました。今回の募集に対しては 6 名の応募があり、審査の結果 1 名を推薦することとなりました。

また同窓会長及び事務局長と今後の活動について議論が行われ、次回同窓会総会及びシンポジウムについて 7 月 27 日に Philippines National Science and Technology Week の開催に合わせて開催すること、テーマは "Disaster Risk Management through Science and Technology" とし、論博メダル授与式も同時に開催することとなりました。

同窓会打ち合わせの後、会長、事務局長とともに在フィリピン日本大使館を表敬訪問し、北川参事官、窪田専門調査員への同窓会活動協力及び総会への出席依頼を行いました。フィリピンの他の同窓会との連携についても、今後積極的に行っていくとのこと。また日本大使館からの支援についても、今後受けられるようにしていくとのこと。



在フィリピン日本大使館で北川参事官と

(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2015/02/27/2946/>)

## JSPS タイ同窓会 (JAAT) Bridge 選考委員会を開催 (3月16日)



フィリピンに引き続き、タイ同窓会における外国人研究者再招へい事業 (BRIDGE Fellowship Program) 選考委員会を当センターで開催しました。

選考委員会は同窓会理事及びバンコクセンター長で構成され、タイ同窓会副会長の Dr. Paritud Bhandhubanyong を選考委員長とし、同窓会長の Dr. Sunee Mallikamarl、その他同窓会理事である Dr. Jiraporn Chauvalit、Dr. Suratwadee Jiwajinda、Dr. Kittisak Sawanyawisuth が出席しました。

今年度は 5 名の申請者があり、最終的にプリンスオブソンクラ大学 (Princess Srinakharinrajat University) の Dr. Vannarat SAECHAN をタイ同窓会より今年度の推薦することになりました。今後、JSPS 本部の承認を得て、最終的に確定する予定です。Dr. Vannarat は昨年 2 月に実施したコン

ン大学での JSPS 事業説明会にもご協力頂いたものです。今後の同窓会活動において、タイ南部の代表として、地域での活動を推進頂ければと考えています。

(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2015/03/16/2921/>)

## JSPS バングラデシュ同窓会 (BJSPSAA) Bridge フェロースhip選考会の実施 (3月24日)

BJSPSAA は、2015年3月21日に第六回国際シンポジウム「Safe Food, Healthy Nation」をバングラデシュ農業大学で開催しました。バングラデシュ国内の政治状況が悪化したため、今回は日本人講演者及びバンコクセンターの派遣は取りやめとなりましたが、本セミナーは150名の参加者があり、成功裏に終了したとのことです。また、同時に同窓会理事の改選が行われ、会長、副会長、事務局長は全員留任となりました。

Bridge 選考委員会に先立ち、在バングラデシュ日本大使館を表敬訪問し、佐渡島志郎在バングラデシュ日本国特命全権大使に面会し、今後の同窓会事業への協力を要請しました。佐渡島大使は、4月以降に在タイ日本国特命全権大使に就任予定です。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2015/03/25/2985/>)

Bridge 選考委員会には、Prof. Dr. M. Afzal Hossain BJSPSAA 会長、審査委員の Dr. Nur Ahamed Khondaker 事務局長、Dr. Md Hazrat Ali 理事、Dr. Md. Emdadul Haque 理事、及び JSPS バンコク研究連絡センター山下センター長が出席しました。今回の募集に対しては9名の応募があり、審査の結果2名の候補者及び1名の補欠候補者を選挙しました。

その後、同窓会理事新旧交代セレモニーを開催し、新旧の理事が集まり、懇談を行いました。新しい同窓会理事会は20名で構成され、その内7名が新任となります。

## JSPS ベトナム同窓生を訪問 (3月28日)

山下センター長が日越科学技術合同委員会に出席のためベトナム・ハノイに出張した際、JSPS ベトナム同窓生との会談を持ちました。

今回は JSPS の外国人特別研究員で京都大学で研究を行った Dr. Do Van Truong ほか数名を訪問し、JSPS ベトナム同窓会の設立支援等について意見交換を行いました。

意見交換の結果、今後は Dr. Phan Ke Long・ベトナム国立自然博物館副館長が窓口となって、今年夏ごろまでには同窓会としての体裁を整え、その後設立できるようにしたいとのことでした。また在ベトナム日本大使館の田中みずき二等書記官、そして何よりベトナム科学技術省 (MOST) が全面的に支援を検討しているとのことです。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2015/03/28/3015/>)

今回は国際連合食糧農業機関 (FAO) 小沼廣幸事務局長補兼アジア太平洋地域代表より、農業と食糧安全保障の観点から農業分野の研究支援や若手研究者育成についてご寄稿いただきました。

小沼事務局長補は国際協力事業団 (現国際協力機構) 青年海外協力隊員/ジュニア専門家 (畜産) としてシリアで活動されたのち 1980 年に FAO に入られ、2010 年 3 月より FAO アジア太平洋地域代表兼事務所長に就任されました。

小沼事務局長補には 2014 年バンコクで行われたアジア学術振興機関長会議にて「気候変動の食糧生産と食料安全への影響」というテーマで基調講演していただきました (<http://jsps-th.org/2014/11/27/2685/>)。

※寄稿の記事・論文、図表、写真等の著作権は執筆者に帰属しています。無断複製又は無断転載はおやめください。

## 世界の農業と食糧安全保障の将来、そして学生や若手研究者に期待するもの



Food and Agriculture Organization  
of the United Nations

小沼廣幸

国際連合食糧農業機関 (FAO) 事務局長補兼アジア太平洋地域代表

現在、世界はすべての人々の需要に見合う十分な食料を生産しているのに、依然として 8 億人もの慢性的飢餓人口が地球上に存在することをご存知でしょうか。この数は世界人口の 9 人に 1 人に相当し、その約 3 分の 2 が我々の住むアジアに存在します。

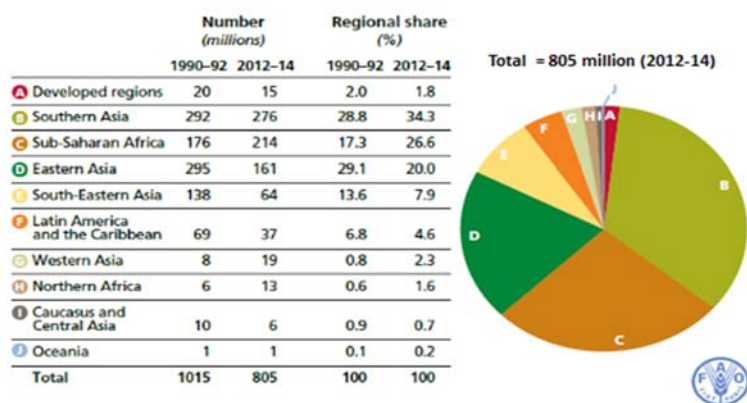
飢餓や栄養失調問題は遠く離れたアフリカの問題と思いがちですが、実は我々が毎日生活しているこのアジア地域に慢性的にはびこる身近で重大な社会問題です。

その原因は食料生産量や供給能力の国や地域による違いや偏り、そして、貧困などに由来する貧しい人たちの十分に栄養に富んだ食料へのアクセスの欠如です。単純に収入が少ないから買えないという理由や、過疎地や山岳地域に住む多くの貧しい人達のように貯蔵や市場、交通手段などの不備の為に物理的に入手が困難という原因が挙げられます。

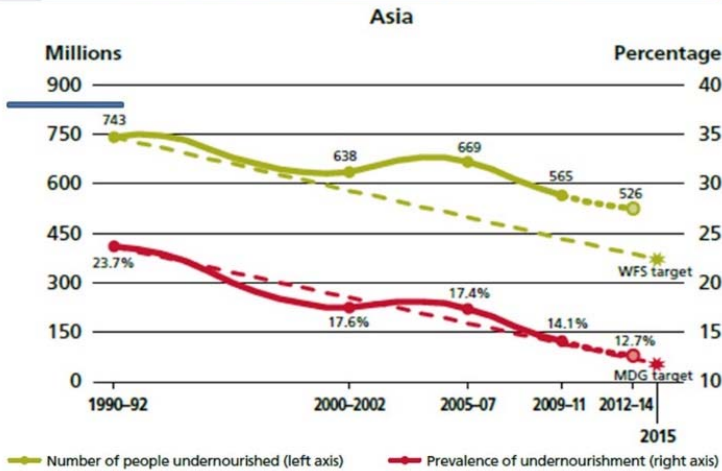
その他にも不衛生な食物摂取や健康上の理由による消化障害や、栄養に対する知識が不足している為に栄養価のかたよった食生活がもたらす栄養失調などの食物の利用上の問題、食料価格の高騰や変動、自然災害などによる食料価格や供給の安定性に起因する問題があります。

開発途上国の自助努力や国連、ドナー援助国、援助機関等によるたゆみない支援により、アジア太平洋地域においては慢性的飢餓人口の総人口に占める割合が国連ミレニアム開発目標 (MDG) の基準年 1990 年の約 24% に対し、今年 2015 年には MDG 達成目標である 12% に半減される見通しが最近明らかになりました。

Numbers and shares of undernourished people by region in 1990-92 and 2012-14 (FAO, August 2014)



MDG No.1 hunger goal is within our reach.  
However, ... (FAO, August 2014)



このMDG目標達成は長い間の夢の実現で、胸を張って喜ぶことですが、その半面、社会の底辺に暮らす残された12%の飢餓人口がいることを我々は忘れてならないと思います。この人々の多くはアジアにおける急速な経済成長の裏側でその恩恵を十分に受けることなく、拡大する貧富の差の中で社会の底辺に追いやられた貧困層や、土地なし農民やわずかな農地しか持たない小規模農民、少数山岳民族、身体障害者やその家族などに代表される社会的弱者が中心です。

この残された12%の人々に支援の照準を合わせ、慢性的飢餓人口の撲滅を図らない限り、我々が目指す公平で平等な社会や真の意味での持続可能な発展は達成できないであろうと思われれます。

国連事務総長が2012年に立ち上げ、国連FAOが中心に推進している“ゼロ ハンガー運動”は、飢餓の撲滅、“0%”の達成を目指して2013年からアジア太平洋地域で始まりました。これまでにチモール、ミャンマー、ネパール、ベトナムが国を挙げて正式に“ゼロ ハンガー運動”を開始し、インド、カンボジア、スリランカ、フィリピン、ラオスなどの国がその立ち上げの準備をしています。ASEANもこの運動に参加することに合意しました。飢餓の撲滅はMDG終了後の2015年後半から始まる国連持続可能開発目標（SDG）と一致しています。

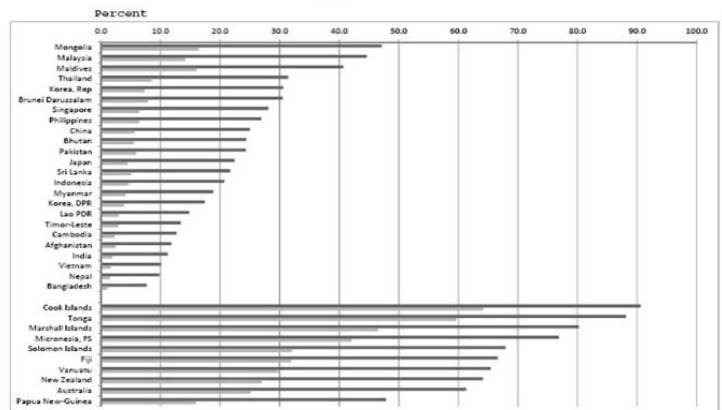
我々が今日の食料安全保障問題を論じる時、前述した約8億人の慢性的飢餓人口が実存する事実に加えて、その2.5倍の数の21億人もの体重過多及び肥満人口の存在や、ビタミンやミネラルなどの微量栄養素欠乏による20億人（世界人口の3.5人に1人）にも及ぶ微量栄養素不足による栄養失調人口の存在を認識しておく必要があります。

一人の地球市民として我々がお互いに助け合いながら共存して生きているはずの地球で、一方で食料が足りず慢性的飢餓に苦しむ多くの人口が存在し、その反面、その倍以上の人達が飽食に浸り必要以上の食べ物を摂取して肥満に苦しんでいる。何で有り余る食料を持つ人は持たぬ人達に分け与えてお互いに助け合って飢餓を撲滅できないのだろうか、ごく単純に思えてきます。

ローマ法王が昨年ローマで開かれた第2回世界栄養会議で“地球からソリダリティー（連帯）という言葉が消えてしまった”と危惧したのを思いだします。これに加えて付け加えておきたいのは、毎年地球上で生産される食料の約30%が実際に我々の食料として利用されず、生産から消費の過程で損失したり棄却されたりされています。

## Obesity and overweight in Asia-Pacific

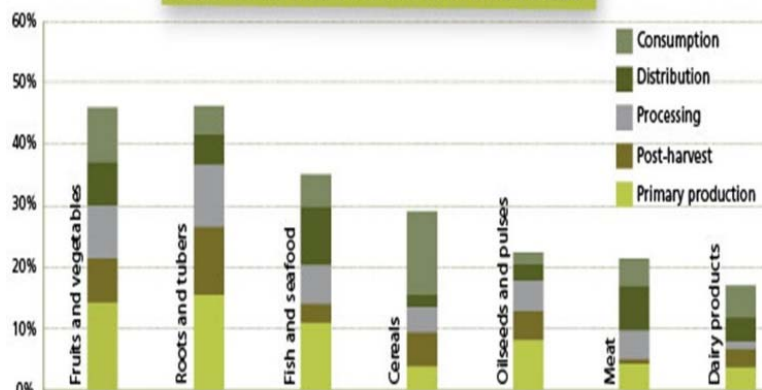
Prevalence of overweight (BMI>=25.0) and obesity (BMI>=30.0) in adults (Age>=20.0)  
Selected countries in Asia and the Pacific  
2008



Note: Overweight prevalence in black, obesity prevalence in gray  
Age standardized rates, 2008  
Source: WHO Global Health Observatory Data Repository, <http://apps.who.int/gho/data/node.main.A8977?lang=en>  
Downloaded 12 Oct 2013

## GLOBAL FOOD LOSSES AND WASTE

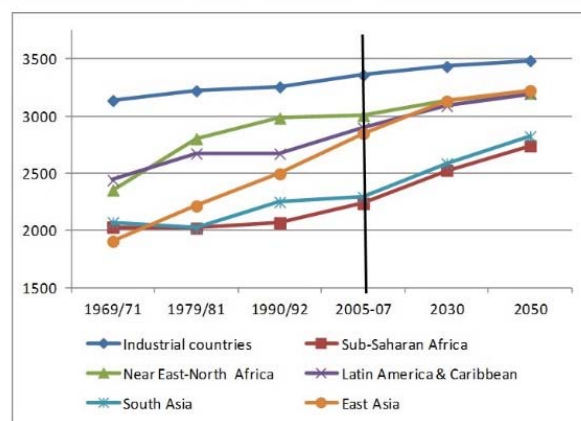
ARE ESTIMATED AT 1.3 BILLION TONNES YEARLY



GLOBAL FOOD LOSSES

世界の食糧安全保障の実質的な問題と多くのチャレンジは 2050 年に向けての将来に有ります。世界の人口一人当たりのカロリーの平均消費量は 2007 年の 2770 kcal から 2050 年には 3000 kcal に増加すると予測されています。それに加え世界の人口は現在の 72 億人から 2050 年には約 92 億人に達すると予測され、その増加する需要に追いつくためには 2007 年から 2050 年までの間に食料の生産を世界全体で 60 パーセント、人口増加の大半を占める開発途上国だけでは 77 パーセント増加させなければならないと推測されています。

## Per Capita Food Consumption Increase (Kcal/person/day)

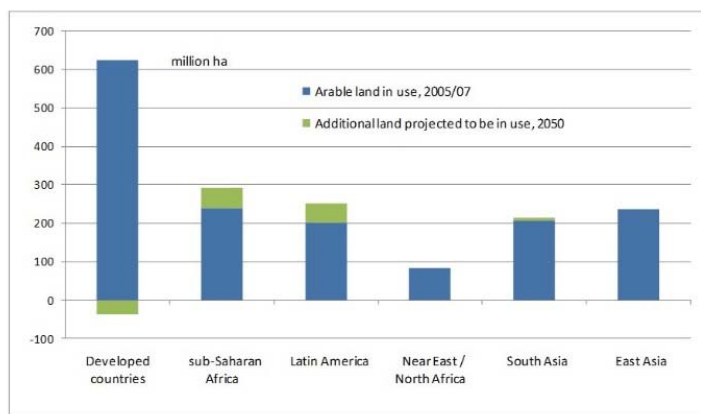


Source: Alexandratos, 2011

その反面、世界の耕地面積拡大の伸び率は鈍化しており、アジア地域では農地の減少がいくつかの国で大きな問題になりつつあります。それに加えて農業のために水を必要としている地域を中心に水資源の不足が深刻化しています。

FAOはこの食料増産目標を 2050 年までに達成できると試算していますが、その条件として約 90 パーセントの食料増産を農業試験研究の推進と品種改良により現存する耕地において単位面積当たりの収量を増やすことで達成し、5 パーセントを農業の集約性を高めること、そして残りの 5 パーセントを耕地の拡大をすることにより達成できると試算しています。

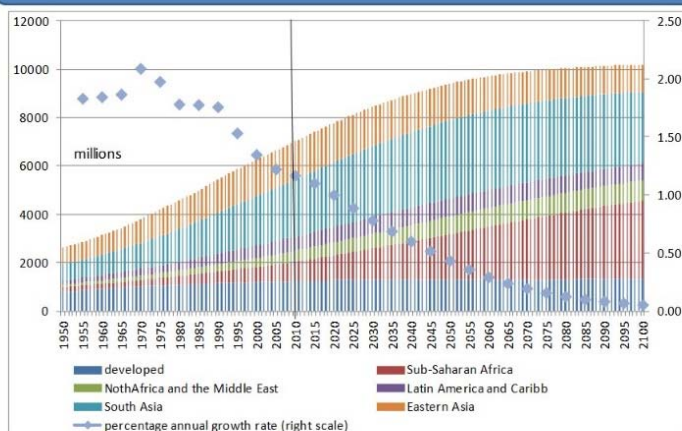
## Limited Scope Exists for Expansion of Arable Land



Source: Bruinsma, 2011

その反面、近年コメや小麦などの主要作物の生産性の伸びは最近まで鈍化し続けており、緑の革命当時に年間の生産性の伸び率が3パーセントを超えていたのに対し、近年その3分の1程度に伸び率が減少しています。また、最近まで過去30年間以上の長期にわたり農業インフラや農業試験研究に対する投資が減少しており、若手農業研究者や農業後継者の育成の遅れや農業離れ現象が続いています。それに加え、今後気候変動の影響による農地の減少、病虫害や自然災害の発生、生産性の鈍化や、バイオ燃料作物と食用作物の耕地や水をめぐる競合が増加すると予測されています。これらの問題は食糧生産に対する影響が大きくそれと同時に予測がつけにくいこと、将来の食料安全保障を予測する上で大きな不安材料となっています。

## World Population Continue to Increase



Source: UN, 2011

こうした状態は世界の人口増加の伸びの大きい2050年にかけての今後30-40年間にピークをむかえると予測され、我々人類が直面する最もチャレンジの高い時期のひとつと推測されます。もし人類が増加する人口の需要に見合う食糧増産を達成できなければ、貧しい食料輸入依存国を中心に飢餓や社会不安、社会暴動、政治不安を引き起こし、世界の秩序や平和に大きな影響を与えることになりかねません。

それ故、現在の若い世代、特に若手農業研究者や農業に従事する若者の役割は特段重要であると思います。グローバルな視点と使命を持ち、そして農業を自分の進路に選んだことに誇りを持って世界の農業と食糧安全保障に貢献してくれる若者達が今後より多く育ってくれることを期待します。



AITの卒業式にて卒業する大学生、院生たちに向け基調講演をする筆者（バンコク、2014年12月17日）



ASEAN 農林業大臣会議にて、ASEAN と FAO の協力合意書に調印後の記念撮影（筆者中央、マレーシア、2013年）

# センター活動記録

バンコク研究連絡センターの1月から3月期のその他活動は以下のとおりです。センターにはタイ及びASEAN 諸国との学術の国際交流を目的とし、日本やタイの研究者や高等教育関係者が訪れます。当センターは訪問者への現地での便宜供与や学術情報の交換・助言を行っています。詳しい活動記録は当センターウェブサイト (<http://jsps-th.org/>) に掲載しておりますのでご参照ください。

## 1月

- 7日 北海道大学・川野辺創国際本部副本部長、鴨志田敏則国際本部国際連携課補佐、佐藤都国際オフィサー来訪
- 20日 泰日工業大学・Porn-anong Niyomka Horikawa 国際交流・広報担当副学長、水谷光一講師、児崎大介交際交流担当来訪
- 23日 JSPS タイ同窓会 (JAAT) 同窓会長 Dr. Sunee Mallikamarl、同窓会理事 Dr. Danai Tiwawech 事務局長来訪
- 28日 大分大学医学研究科内田智久助教来訪

## 2月

- 5日 東京大学工学系研究科 (東大まちづくり大学院) 柏崎梢・特任助教、佐藤遼・学術支援専門職員来訪
- 6日 高知大学矢田裕美国際企画係長、西本晶美国際連携係事務職員来訪
- 9日 早稲田バイオサイエンスシンガポール研究所 (WABIOS) 椿雅行事務長来訪
- 9日 古城紀雄大阪大学名誉教授、大阪大学ASEANセンター長望月太郎教授、関達治キングモンクット工科大学トンプリ (KMUTT) 総長特別補佐 (大阪大学名誉教授・元大阪大学バンコク教育研究センター長) 来訪
- 16日 熊本大学大学院自然科学研究科・濱武英准教授、マーケティング推進部・西山弘樹副課長、自然科学系事務ユニット・福田賢一副課長、前田巖主任来訪

## 3月

- 8日 北海道大学タイ同窓会に出席
- 10日 筑波大学グローバル推進室教育推進部・横瀬雅年専門員、国際室・立原公美子主任来訪
- 14日 明治大学留学生壮行会に出席
- 19日 在タイ日本大使館・タイ国元日本留学生教会 (OJSAT) 主催 国費留学生壮行会及び帰国留学生歓迎会に出席
- 20日 明治大学政治経済学部加藤久和教授来訪
- 20日 タイ学術会議 (NRCT) を訪問
- 23日 山口大学大学院東アジア研究科朝水宗彦准教授来訪
- 27日 神戸国際大学入試広報センター小谷口秀一職員、福井工業大学松浦悦郎理事・ASEAN 事務所長来訪



## ダイスケさんのダイ好きアジア

### ✿ カトマンドゥの路上にて



（はじめに）本原稿を書き上げた後の2015年4月25日、M7.9の大地震がネパールを襲った。この美しい世界遺産のダルバールも瓦礫と化してしまったことは大変心が痛む。甚大な被害を被ったネパールの一刻も早い復興と被害者の皆様の冥福を心から祈りたい。

【写真上：世界遺産のダルバール広場】

【写真中：外国人旅行者が多いタメル地区ではまだまだ英語の看板が目立つ。】

【写真下：ダルバール広場に向かう道の途中にて野菜売りの女性】

アジアに面白いのはその多様性にある。仕事やプライベートで様々な国に行くが、その多様性にはいつも圧倒される。初めて行った場所が、そのあまりにも素晴らしさに再び訪問したい気にさせられることも多い。対バンライブを見に行ったら本命よりも他のバンドが気に入って帰ってくるようなものだ。

今回は初めてネパールに来た。バンコクに戻る飛行機の出発までのごくごく僅かな時間を使って街を探索する。迷路のような小路を縫うようにして世界遺産のダルバール広場へと向かう。出発したときには英語の看板が飛び交っていた通りが、どんどんネ



パール語だけになっていく。当然のごとく、外国人らしき人は僕しかいない。

街の中には随分昔に建てられた寺院が人々の生活に溶け込んでいる。そして誰も外国人の僕に見向きもしない。埃っぽい路上には人が満杯で、そこには生命力がみなぎっている。本当の街の姿は、実際に歩いてみないと分からない。これだけ人で溢れている通りでは、おそらく逆に生命の危険は無いだろう。一番危険なのは人通りが誰もいない場所だ。



カトマンドゥはここ最近歩いた街の中では一番面白いところだった。ここには過去と現在が共存していて、その上で混沌の中に奇妙な調和が存在する。ネパールは何でもまぜこぜだと、人は言う。ヒンズー教も仏教も混ざって共存している、人の顔も、中国系からインド系、欧州に近い顔の人もいる。こんな面白い街はない。歩いている途中からは声すらかけられなくなった。

今更ながらに思い出したのだが、昔聴いたThe Blue Herbの「路上」という名曲はカトマンドゥが舞台だった。そして僕はこの曲の「人生の勝負時がきたら待ったなしだ」という一言に引かれるようにしてアジアにやってきた。カトマンドゥの路上を彷徨っていると、過去も今も全てが入り乱れ、ネパールの路上の人々も外国人も全く別世界の住人のように思えてくるのである。



【写真左上、右下：タメル地区よりダルバール広場へ向かう道】

【写真左中：ダルバール広場の参道、左下：ダルバール広場での物売りの女性】

## ■タイ TRF と中国 CAS が MOU 締結

タイ政府の Yongyuth Mayalarp スポークスマンの発表によると、タイ政府は科学技術開発に関し、中国政府と MOU を締結する予定である (1月6日時点)。

昨日、Prayut Can-o-cha 首相はガバメントハウスに中国科学院 (Chinese Academy of Sciences: CAS) の白春礼院長を迎えた。MOU は CAS とタイ研究基金 (TRF) の間で締結され、タイと中国の研究者の共同研究をより一層強化することが可能になる。

両者会談の後、Yongyuth 博士は次のように述べた。“Prayut 首相と白院長は両国間の協力について協議し、2015年の目標について意見を交わした。Prayut 首相は科学分野での協力について、衛星通信、鉄道交通システム、代替エネルギー開発ならびにバイオテクノロジーの4つの優先分野を設定した。Prayut 首相はこれらの分野における両国の研究者間での知的協力の重要性を強調した。また、両者は科学分野での長期の協力体制と、末永いパートナーシップ構築に向けて協議を開始した。Prayut 首相は最近行われた中国の習近平国家主席との会談についても述べ、首相は廃棄物管理、ゴム製品の製造、自動車試験の分野における協力を希望している。

Prayut 首相は軍司令官でもあり、防衛技術の分野でタイと中国が協力することにも興味を示している。また、中国の宇宙技術開発分野にも同様に興味を示しており、将来の都市計画のため3D マップ技術開発を促進する計画である。”

(1月6日 Bangkok Post 紙)

## ■教育改革における大学の役割

1月8日チェンマイ大学において行われた教育副大臣の Krissanapong Kirttikara 博士が座長をつとめた会議において、“教育改革における大学の役割”にかかる方針が発表された。この会議にはタイ国内の大学や連携ネットワークの副学長や役職員等 50 名が参加した。議事の要約は次のとおり。

—運営体制：大学のシステムの強化にとって最も重要な要素

Kirttikara 博士はこの会議の開催目的について、体験を共有すること、それぞれの大学の強みと特徴を認識すること、お互いの成長を相互に助け合うこと

であると述べた。さらに、予算以外にも大学が利用できる外的資源は数多くある。博士は、前進するためにはっきりとした方向性を打ち出せるよう、国内の変化を理解してほしいと述べた。

過去 20 年にわたり 20 以上の大学評議会との仕事に携わった経験から、大学システムを強化するために最も重要な要素は優れた管理体制の構想であると博士は考えている。また、教育政策や計画は、教育と学習、研究、研究支援、芸術・文化の保護といったミッションに沿ったものでなくてはならない。しかしながら、こういった事業はすべて大学のイメージを強化し大学の役割について一般市民の認識を高められるよう、優れた管理体制の下で運営される必要がある。すべての大学の事業は地域社会のニーズに応えるものであり、利益となるものでなくてはならない。

### —“Outside-in”の提案

博士は参加者に、他者の意見に集中する、すなわち“Outside-in”アプローチをとるよう促した。他者の意見を取り入れてみることで、それまで有用であると考えていた教育改革の方向性が十分明確でなかったことに気づくこともある。大学の行っている事業は多くの人にとってわかりづらいものであるので、大学はコミュニケーションに力を入れ、実施している事業をわかりやすく一般市民に紹介する必要がある。

過去の調査によると、大学の卒業生 3 名中 1 年以内に就職できるのはうちわずか一人であった。このため、博士は大学に、政府からの投資、親の負担、学生が費やす時間 (最大 4 年間) 等を考慮し、コースを見直すよう求めた。

### —市民への説明責任

現在大学の抱える、苦情、処罰、学生ローンの支払いや大学のコースといった課題は市民に公開されている。大学が設置するコースは卒業生の就職率に反映されるため、コースの中には開設が不要と思われるものもあり、見直しが行われるべきである。このことは大学がまだ市民への説明責任を果たしていないことを示している。

### —国内の人材への需要

大学は、水道システムの開発や大量輸送交通の開発 (高速鉄道計画) 等、国のインフラ整備や大規模計画の実施に役立つよう、労働年齢の人材確保等、国の発展目標に沿って人材を輩出すべきである。

ーチェンマイ大学:大学の自治に対する評価の規範自治大学の一つであるチェンマイ大学の評価に参加して、博士はチェンマイ大学の運営は大学によりよい変化を生じさせたと感じたため、チェンマイ大学は他の自治大学の規範となつてほしいと述べた。自治大学は、地域社会と国にもたらした利益に基づいて評価されるべきであり、大学の事業に対する投資は、事業がもたらした利益によって評価されるべきである。評価には実践的証拠、正確な卒業・修了者数、イノベーションや論文発表数等が用いられるべきである。

ー経営企画担当部署は大学のブレインであるべき博士は大学の経営担当部署が事業の計画・運営において重要な役割を果たすよう求めた。こういった部署は大学のブレインとして“Outside-In”、“Inside-Out”両方のアプローチを用いて市民の認識を促すべきである。

大学は批判に効果的に対応することで、地域社会とタイの発展に寄与できると繰り返し述べた。

(1月13日 タイ教育省)

## ■ 研究者2名がマヒドン賞受賞

1月28日、2014年のマヒドン賞授賞式がタイ王宮で開催され、Maha Chakri Sirindhorn 王女殿下より2名の受賞者に賞が授与された。受賞者は次のとおり。

- ・株式会社バイオファーム研究所所長 遠藤章教授
- ・ジョンホプキンス大学ブルームバーグ公衆衛生研究所 Donald A. Henderson 教授

医療分野での受賞となった遠藤氏は、血中のコレステロール値を減少させる物質を菌類から抽出することに成功し、コレステロール低下に有効なスタチンを1970年代に発見した。この発見により開発された心筋梗塞の予防薬は世界中で多くの人の命を救っている。

遠藤氏は1950年代にニューヨークに留学したことが研究の起点であったと述べた。ニューヨークでは多くの高齢者が心臓病を罹患していた一方、日本人の心筋梗塞死亡者数はがん死亡者数の3倍であった。遠藤氏は日本に帰国後、6000株の菌類を調べ、コレステロール低下に有効なスタチンを発見した。

公衆衛生分野での受賞となった Henderson 博士は、1966年から1977年に世界保健機構 (WHO) の

天然痘撲滅キャンペーンを主導し、天然痘の根絶に功績をあげた。

このキャンペーンは集団予防接種と集中調査プログラムの強化に世界的に取り組んだもので、ソマリアの症例を最後に天然痘は根絶された。Hederson 博士は、このキャンペーンは天然痘の撲滅は可能であることを世界に示したと述べた。

マヒドン賞には25か国から59名がノミネートされており、2名の受賞者は受賞について光栄であると述べた。

(1月28日 Bangkok Post 紙)

## ■ 職業教育局 (Ovec) が2000名の学生に対する奨学金を創設

職業教育局 (Ovec) は学生の能力向上を目的として、学生の海外留学を支援する奨学金を創設する。Ovec 事務局長の Chaiyapruerk Serirak 氏は、職業訓練課程の学生2000名に対し支援を行うと発表し、次のように述べた。

“この奨学金の創設については、Ovec 当局、教育省担当者、ラジャマンガラ工科大学教員が参加した会議で決定された。

この奨学金にかかる予算は2029年まで実施される一郡一奨学金 (one district, one scholarship) より拠出され、Ovec は現在プログラムの申請要件について検討している。奨学金の支給対象は次のとおりである。

- ・ 特殊な技術的スキルの習得に特化した海外のプログラムに参加する学生500名に対する短期の奨学金。
- ・ 国内の特殊な技術コースで勉強する学生400名に対する奨学金。
- ・ 技術分野での学士の学位取得を目指す学生、特別な技術的スキルの習得を目指す学生それぞれ100名に対する奨学金。
- ・ 海外の大学で大学院レベルの学位取得を目指す学生150名に対する奨学金。ただし、修了後はタイ国内の職業訓練校で教職に就くという条件付き。
- ・ 職業訓練資格を取得し、タイ国内あるいは海外で学士の学位取得を目指す学生400名に対する奨学金。
- ・ 優秀な成績を修め、海外の学士または修士・博士の学位の習得を目指す学生100名に対する奨学金

- ・ タイ国内または海外の大学で学士または修士・博士の学位の習得を目指す250名に対する長期の奨学金 (期間は7年~9年)

この奨学金には、生活費、教材費、健康保険、医療費、授業料、語学コース、特別訓練プログラムにかかる費用が含まれる。”

(2月5日 Bangkok Post 紙)

## ■ マヒドン大学と日本がハイテク医療用ロボットを共同開発

マヒドン大学は日本政府および日本のトップ研究所と協力し、医療用ロボットの開発ならびに試験を行うことになった。このMOUはタイ生命科学研究所 (Thailand Center of Excellence for Life Sciences: TCELS)、タイ国科学技術省、マヒドン大学工学部、日本国経済産業省、三菱研究所、パナソニックの間で締結された。

TCELSの最高経営責任者である Nares Damrongchai 博士は次のように述べた。

“この協力関係の下、日本側はタイ側に先端技術を提供し知識移転を行い、市場の需要と国際基準に合う医療用ロボットの開発を行う。先端技術を用いた医療用ロボットの開発は、科学技術の構築と世界市場で戦える商品開発の強化という科学技術省の計画の一部である。”

バイオ医療工学部の Jacrit Suthakorn 主任准教授は次のように述べた。

“バイオ医療・ロボット工学センターは当部局の下で10年以上にわたり医療用ロボットの研究と開発を行ってきた。大半のロボット研究と開発はプロトタイプロボットの開発に集中しマンパワーを輩出してきた。さらに、当部局はTCELSと協力して、ロボット製品開発のためのハイテク医療用ロボット研究チームを組織し、医療用ロボットや医療用設備の試験と質保障を行う。この研究チームの目的は研究の見直しと市場向け製品の生産である。”

(2月9日 The Nation 紙)

## ■ キングモンクット工科大学トンプリ (KMUTT) が医療用技術ロボット開発に着手

KMUTTが医療セクター向けロボット開発プロジェクトに乗り出した。プロジェクトは、ロボット式調剤装置の開発に第一目標を定めた。

KMUTT フィールドロボティクス研究所 (FIBO) 所長の Siam Charoenseang 博士は次のように述べた。

“我々は、患者数に比べて数が不足している医療従事者の負担を軽減することを目標としており、業務の効率化と医療ミスの減少が期待できる。我々は実際の仕事環境に基づいてロボットを開発し、タイの実情に応じた問題解決策を提供する。”

FIBOはタイ生命科学センター (Thailand Centre of Excellence of Life Sciences: TCELS)、Supreme Hitera Co Ltd.と協定を締結、協力してプロジェクトを進める。

Supreme Hiteraの Kamthorn Kanchanawatte 社長は、“ロボット式調剤装置の導入により、病院のスタッフは他の仕事に時間を割けるようになり、人的ミスと患者の待ち時間を減らすことができる”と述べた。

TCELSの最高経営責任者の Nares Damrongchai 博士は次のように述べた。

“医療用ロボットの開発はタイの競争力と経済の強化につながる。また、このプロジェクトは人材開発と人材の流動にかかるものでもある。

我々が西洋から購入したロボット技術は、コマンドキーをタイ語に翻訳するなどタイの社会に適合させる必要があった。

病院のスタッフはロボットをどのように操作するかを学ぶ必要がある。ロボットは自動で動くとはいえ、システムを継続的にメンテナンスする必要がある。このプロジェクトを今後も実施すれば6億パーツの労働コスト削減が期待できるため、約1億パーツを投資する価値はある。”

Siam 博士は、今後病院での高難度の業務に対応するためにより高度なロボット開発を行う可能性がある」と述べた。

(2月16日 The Nation 紙)

## ■「理系分野での男女格差は学生時代から始まっている」と国連が発表

ユネスコの調査によると、アジアでは科学、技術、工学、数学（STEM）分野で女性に対する賃金格差がいまだに多く見られる。

ユネスコバンコク事務所は国際女性デーにこの調査結果を発表し、このような格差は職場ではなく、学生時代にすでに顕著であることが明らかになった。

この調査は“アジアの科学、技術、工学、数学分野における女性をとりまく複雑な公式”と銘打ち、これまで不足していた科学関連分野における男女格差についての地域調査を補完する形で行われた。ユネスコバンコク事務所の Gwang-Jo Kim 局長は次のように述べた。

“STEM 分野における女性をとりまく課題について対話する上で、この調査は重要な貢献を果たした。また、より包括的な教育、そしてこれらの分野での専門教育成に対し、地域そして社会において増大している需要に実際に応えるような教育実現のための青写真を提供した。

アジア太平洋地域において、多くの国が STEM 分野を国家政策の優先分野と位置づけている。しかし、女性が高等教育に続いて職業として STEM 分野を選択する機会はもちろんのこと、STEM 分野における女性の地位は国によって異なる。”

この調査はアジア全体を対象としていたが、カンボジア、インドネシア、マレーシア、モンゴル、ネパール、韓国とベトナムについてはより詳細な調査が行われた。

アジア地域の STEM 分野における男女格差は、高等教育界や職場で非常に顕著である。韓国では、学士レベルでの女性の割合は、2011 年時点で科学分野で 52%、工学分野で 19.5%であったが、博士レベルではそれぞれ 38%、12%と数字が落ち込んだ。調査によると、女性は数学系の領域よりも科学系の領域を選択する傾向がある。これは STEM 分野における女性の占める割合が他と比較して高いマレーシアのような国でも見られ、医学分野では女性の比率が 61%であったのに比べ工学分野では 36%に過ぎなかった。

このような傾向は職業選択にも直結している。ユネスコ統計研究所の最新データによると、情報が入手できたアジア地域の 17 カ国のうち、研究者全体に占める女性の割合が半分以上であったのは、カザフスタン、タイ、フィリピンの 3 カ国のみであった。（3月10日 The Nation 紙）

## ■高等教育機関世界ランキングでタイの大学はランキング外

Times Higher Education (THE) の行った 2015 年世界著名大学ランキングにおいて、タイの大学はランキング入りできず、世界の学術界においてタイの教育機関は高い評価を得ていないことが分かった。

THE はランキングを行う際には研究者招待限定方式を用い、15 の言語で 142 か国 10500 名の研究者に対し行われる。

このランキングの編集者の Phil Baty 氏は The Nation 紙の取材に対し次のように回答した。

“研究者は、専門的見地から、教育・研究で最も優れた功績をあげていると思われる機関を 10 機関以内でノミネートを行う。

タイの高等教育機関に対してはランキングに入るだけのノミネーションがなかった。その理由については知る術はないが、世界著名大学ランキングでランキングに入らない機関の多くは、毎年 10 月に 13 の項目に基づいて決定される THE の世界大学ランキングにおいても、国際化の分野で点数が低いことが多い。この結果が意味するものは、タイの大学が留学生や外国人教職員にとってあまり魅力的でない、海外の大学との連携が十分でない、「世界共通言語」である英語での研究論文発表が十分でない、等である。

大学が世界ランキングで上位に入るための唯一の方法は、世界中の学者に、その大学が優れた教育・研究機関であると認識されることである。”

ランキングは昨日公表され、世界のトップ 100 大学を決定した。上位 3 位は、アメリカのハーバード大学、イギリスのケンブリッジ大学とオックスフォード大学であった。アジアで最も上位にランキングされたのは東京大学の 12 位、ASEAN では国立シンガポール大学の 24 位であった。

（3月13日 The Nation 紙）

## ■ ミャンマーの学生はキャンパスで政治的自由を獲得

ヤンゴン大学大学院には、ミャンマーの厳格な軍事政権の支配の下では考えられなかった政治科学のディプロマコースで学んでいる学生がいる。彼らは、今年後半にミャンマーで数十年ぶりに行われる選挙における何百万人の選挙人のうちの一人になる。

ミャンマーの大きな転換に対し賞賛の声と外国資本の流入が起こった反面、核となる改革が後退していくことを懸念する声もある。今月初め、学生主導の教育改革を求めるデモを警察が暴力で鎮圧し、少なくとも130名の学生が逮捕され、国際社会の激しい糾弾を受けた。

ヤンゴン大学はかつてアジアのトップ大学の一つであったものの、過去20年間の大部分が軍事政権によって閉鎖され、植民地時代に建てられた校舎は草むらに覆われていた。大学は軍部の支配のもと硬化した教育システムを見直すため、2013年後半に再開された。

政治科学のディプロマコースを実施している国際関係学部長のChaw Chaw Sein教授は、今や学生は世界各国の政策についてだけでなく、ミャンマーにおける政治体制の変化と政治について語り、議論することができる」と述べた。

教授は、国際社会は、ミャンマーの政治は半民主主義であり、半市民政府であると批判しているが、我々はソ連崩壊の実例から学ばなくてはならない。ミャンマーの政治的背景を考慮すると、段階的な改革がより望ましい、と述べた。

しかし、多くの若者はもっと迅速な変化を求めている。ビルマ学生連合に所属する学生は、2014年に施行された教育法は学問の自由を阻害しており、義務教育を10代前半までとすることや、組合を組織する自由、少数言語での教育の自由などを認めるよう改善が必要と考えている。その後逮捕された、ビルマ学生連合のリーダーであるMin Thawe Thitは次のように述べた。

“我々が求めているのは政府から独立した自治大学であり、トップダウンの方針ではなくボトムアップの決定である。”

オーストラリア国立大学のミャンマーの専門家であるNicholas Farrelly氏は、次のように述べた。“ミャンマー社会における非常に重要で急激な過渡期において、学生の抗議活動が実を結んだ。しかし、現在の学生は先駆者である88年世代と比べる

と政治的に無垢であり、必ずしもミャンマーの暗黒時代の実態を理解していない。

しかし、いずれの世代も暗黒時代に逆戻りすることは望んでない。”

(3月24日 The Nation 紙)

## ■ キングモンクット工科大学ラカバン集団横領事件の早急な真相解明

元学長を含めた14名の容疑者を出したキングモンクット工科大学ラカバン(KMITL)における14億7400万バーツの横領事件であるが、この重大事件が法廷に持ち込まれるまで3ヶ月余りの日数しか要しなかった。本事件は、昨年12月16日にタイ政府犯罪防止局に権限委譲され、慎重な捜査の末この資金流用の企てを行った中心人物に迫っている。犯罪の中心人物の割り出しと残る3名の容疑者逮捕には多少の時間を要するが、捜査チームはKMITLというバンコクの名門大学の裏に構築された犯罪組織の核心に既に揺さぶりをかけており、容疑者達の法廷は本年6月22日に開催される予定となっている。

本事件は、8,000万バーツの資金が大学の銀行口座から消失したことをきっかけに明るみになり、捜査の結果KMITLの財務部長が元銀行支店長と共謀の上、大学の資金を横領したことが分かった。また、2012年から29回に渡って10億バーツ近くの横領が行われていたことも判明した。更なる捜査により、主犯格とみられる会社経営者が割り出されたものの、この人物は既にタイを出国して、香港から英国に向かって現在逃亡中とのことである。多くの証言によると、この主犯格が電話で「ボス」と呼んでいる人物がおり、その人物を確定し真相を解明するために逮捕を急いでいる。

2月24日には、退職後に自身の銀行口座を閉鎖したことが判明したKMITL元学長、同学長補佐、及び同講師も関与が疑われて起訴されている。

(3月30日 Bangkok Post 紙)

## 日本学術振興会バンコク研究連絡センター アクセス&コンタクト

### アクセス

高架鉄道 (BTS) Asoke 駅、1 番出口から徒歩 5 分  
地下鉄 (MRT) Sukhumvit 駅、1 番出口から徒歩 5 分

### コンタクト

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159  
Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand  
Tel +66-2-661-6533 Fax +66-2-661-6535  
Website: <http://jsps-th.org> Email: [jspsbkk@jsps-th.org](mailto:jspsbkk@jsps-th.org)  
facebook: JSPSBangkok



### ■ 表紙写真紹介



#### Ubun Ratchathani (ウボンラーチャタニ)

ウボンラーチャタニはタイ東北部にある県で、東はラオス、南はカンボジアと国境を接しています。国境沿いには断崖絶壁からの壮大な景観や先史時代の壁画、磨崖仏が点在しています。パー・デーム国立公園やケータナ国立公園を擁しており、豊かな自然に加え、脈々と受け継がれている仏教の歴史や文化を感じることができます。

(参照:タイ国政府観光庁 HP)

当センターでは、2 月に開催された JSPS 事業説明会でウボンラーチャタニを訪問しました。

### ■ 編集後記

4 月 1 日より、轟の後任の国際協力員として鹿児島大学より赴任しました。今後 1 年間、研修を兼ねてバンコクセンター勤務となります。1 年間という限られた時間の中で、バンコクに限らずなるべく多くの場所・国を訪れ、いろいろな方とお会いして見識を広めたいと思います。タイ語もまだまだ初心者ですが、親切なタイの人々に助けられている毎日です。これからどうぞよろしく願いいたします。

今回の「バンコクの風」では、国際連合食糧農業機関 (FAO) 小沼廣幸事務局長補兼アジア太平洋地域代表より、農業と食糧安全保障の観点から農業分野の研究支援や若手研究者育成についてご寄稿いただきました。お忙しい中、貴重なお時間を割いて当ニュースレターのために執筆いただきましたことをこの場を借りてお礼申し上げます。

(バンコクセンター国際協力員 辻 修子)